様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：１７５０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１３０５６

研究課題名（和文）幼小接続期におけるアンガーマネジメントプログラムの開発

研究課題名（英文）Development of Anger Management Programs in the Early Childhood and Elementary School Connections

研究代表者
麻生　良太（Aso, Ryota）

大分大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０５７２８２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　幼児の不安やとまどいだけでなく，幼児の期待，そして幼児が小学校に対してどのような認識をもっていると幼保小の教員が認識しているか，そしてその認識は幼児教育と小学校教育の教員の間でどのようにズレているかを明らかにすることは，今後の幼保小連携，そしてアンガーマネジメントを踏まえた接続期カリキュラムを作成していくうえで，重要な情報となると考え，研究を実施した。
　幼児が期待していると思うことについては，期待・不安両方で幼児教育の教員と小学校教員間に認識のズレも確認できた。この認識のズレを幼児教育の教員と小学校教員間で共有することがカリキュラム等の作成において重要であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
幼小の教職員が幼児期の終わりの子どもの姿についての相違点を認識することは，お互いの認識の違いを埋める具体的方策や，お互い課題であると考えている子どもの姿をどのように育むのかについての具体的な保育・教育を提案していくうえで必要であると考えられる。本研究の成果はこれらの相違点を可視化するという学術的意義があり，また，幼児教育施設の教職員が集まる研修等で幼児教育段階における子どもの育ちについてのお互いの理解を深めるうえで有効であるという社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The identification of not only the anxieties and hesitations of young children, but also their expectations, their perceptions of elementary school, and the discrepancies between these perceptions and those of preschool and elementary school teachers will provide important information for future collaboration between preschool and elementary school, and for the development of a curriculum for the transitional period based on anger management. This will provide important information for the future development of the connection period curriculum based on anger management.
Regarding what they think young children expect, we found a gap in perception between early childhood education teachers and elementary school teachers in terms of both expectations and concerns. The results suggest that it is important to share this gap in perception between early childhood education teachers and elementary school teachers when creating curricula.

研究分野：発達心理学

キーワード：幼児期の終わりまでに育ってほしい姿　アンガーマネジメント　小学校教育　幼保小連携

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は，幼小接続期（年長児後期～小学校１年前期）の子どもの怒りの感情についての理解の発達を系統的に明らかにし，幼小接続期におけるアンガーマネジメントプログラムを開発することを目的として行うものであった。具体的には，（１)幼児教育から小学校教育（低学年）の幼児児童の感情についての理解，特に怒りの感情についての理解の発達を，幼児期年長児から小学校１年生の２年間にわたって縦断的に明らかにする。（２)（１)で得た知見をエビデンスとし，年長児後期～小学校１年生前期に継続して実施できる怒りの感情理解の発達にもとづいた教育支援プログラム（アンガーマネジメントプログラム）を開発する。これらの研究成果は，問題となっている「小１プロブレム」対策において，教職員が感情についての知識及びその抑制の仕方を子供に教える際の支援・指導に大きく寄与することと考える。

こうした背景で研究を開始したが，新型コロナウイルス拡大のため，直接幼児へ行う調査研究を行うことが難しくなった。そこで，その前段階として，幼保小の教職員が就学前から就学後の幼児や児童が小学校に対してどのような認識をもっているかについての把握を行うこととした。

２．研究の目的

幼保小の教職員が就学前から就学後の幼児や児童が小学校に対してどのような認識をもっているかについて，これまでの研究では「小１プロブレム」の文脈で特に小学校進学後の幼児の不安やとまどいについて，幼保小の教員に調査することが多い。しかしながら，実際幼児は小学校進学に対して期待を抱いていることも多いことが報告されている（椋田，2009)。

幼児の不安やとまどいだけでなく，幼児の期待，そして幼児が小学校に対してどのような認識をもっていると幼保小の教員が認識しているか，そしてその認識は幼児教育と小学校教育の教員の間でどのようにズレているかを明らかにすることは，今後の幼保小連携，そして接続期カリキュラムを両者が話し合いながら作成していくうえで，重要な情報となると考える。

本研究では，期待・不安・認識を，木村(2010)が提案する「社会文化的環境」「物理的環境」「対人的環境」の３つから整理し，幼保小の教員が，小学校に進学する幼児が小学校に対してどのような期待・不安，そして小学校に対する認識を抱いていると考えているかを調査することを目的とした。

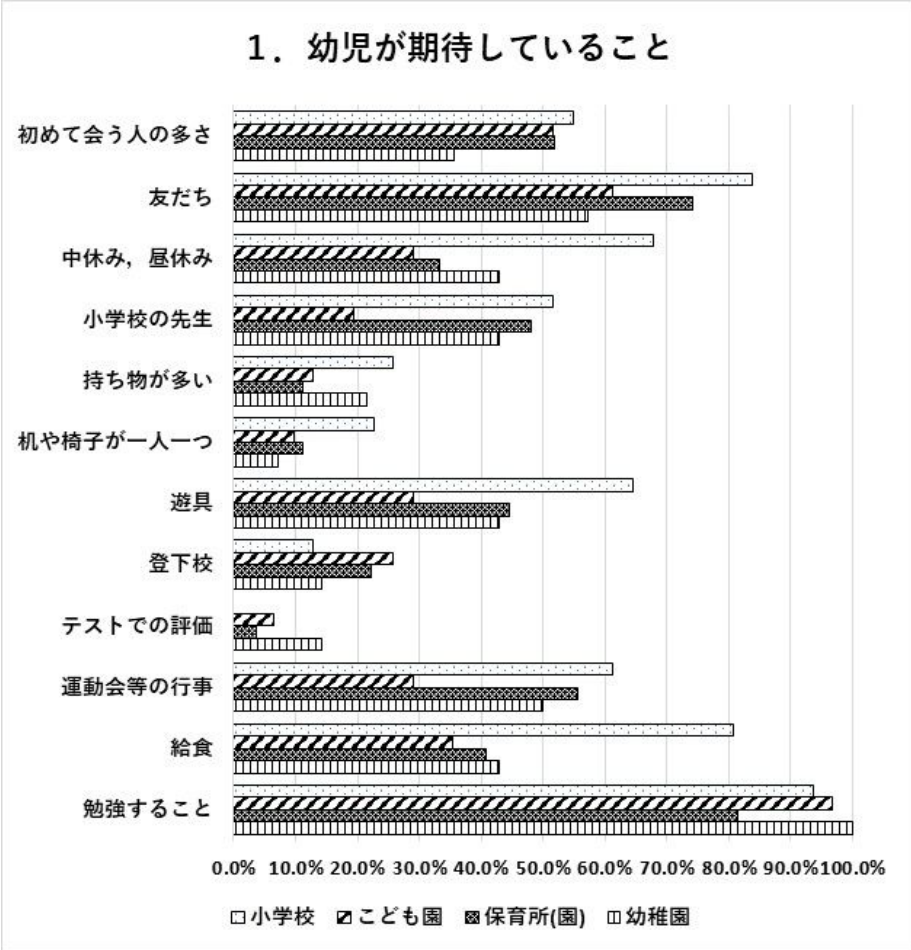
３．研究の方法

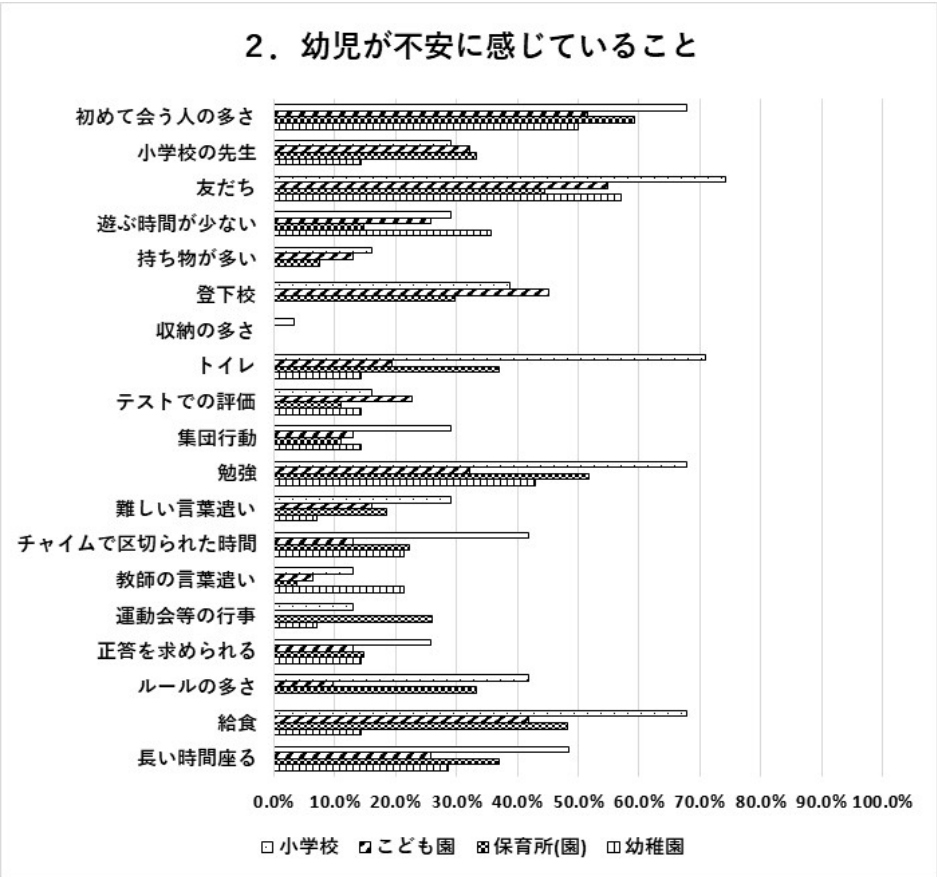
幼稚園，保育所（園)，こども園，小学校で幼保小連携に携わる教職員を対象とした。内訳は幼稚園教諭 14 名，保育所（園）教諭 27 名，こども園教諭 31 名，小学校教諭 31 名の計 103 名であった。幼保小連携に関するアンケートとして，(1) 小学校に入学するにあたって，幼児が期待していることはなんだと思いますか【12 項目】，(2) 小学校に入学するにあたって，幼児が不安に感じていることは何だと思いますか【19 項目】，(3) 幼児は小学校についてどのような認識を持っていると思いますか【20 項目】を質問し，該当すると思うものすべてに〇をつけてもらった。

４．研究成果

幼児が期待していると思うことについては，「社会文化的環境」において，全校種の多くの教員が，幼児が期待していると考えている。一方，幼児が不安に感じていることについては，「対人的環境」において多くの教員が，幼児が不安に感じていると考えていることが明らかとなった。ただし，期待・不安両方で幼児教育の教員と小学校教員間に認識のズレも確認でき，この認識のズレを幼児教育の教員と小学校教員間で共有することがスタートカリキュラム等の作成におい

て重要であることが示唆される。





５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 麻生良太
２．発表標題 幼児の小学校に対する期待・不安・認識を幼保小の教員はどのように認識しているか
３．学会等名 発達心理学会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関